文化

輪ゴム銃 熱中再び

◇夢中だった子供時代、サイト立ち上げ愛好家集う場に◇

中村光児

子供のころ、魚屋の店先でぶんぶん飛び交うハエを輪ゴム銃で撃ちに撃ったことがある。二時間ほどで撃ち落としたハエの数、百四十八匹。輪ゴム銃をこよなく愛した私の勲章と言える記録だ。魚屋のおじさんが半ばあきれつつも感嘆してくれたのがうれしかった。

割りばしで作った輪ゴム銃で遊び始めたのは小学三年くらいから。その後は木材で設計、製作するようになり、威力と命中精度の向上に腐心した。夏の夜は私にとっての風物詩、ゴキブリ退治にいそしんだ。暗闇の台所で電灯をつけた瞬間、かさかさ高速で逃げるゴキブリを追っては狙うスリルに夢中だった。

が、輪ゴム銃への愛着は大人へ近づくにつれ冷めゆき、就職したころには完全に過去の記憶となっていた。そのまま四十歳を迎え、転機が来た。

▼▼▼

ネット上に仮想〝協会〟

パソコンが急速に普及した二〇〇〇年、私は自分のホームページ（HP）を構築した。デジタルフォントを開発、販売する企業でHP作成を担当しており、興味を持った。

競技大会で筆者が使っている輪ゴム銃

誰もまねできない内容を楽しめるよう、現実感あふれる仮想世界を生みだそうと考え、「日本ゴム銃射撃協会」というHPを立ち上げた。

第一条「日本ゴム銃射撃協会は、ゴム銃射撃の健全なる普及と愛好者の親睦、情報交換に資することを旨とする」といった規約を定め、自ら理事長に〝就任〟した。姉妹団体「大日本ゴム銃猟友会」も発足させ、一人で悦に入った。

仮想世界のはずだったが、思いがけず「入会したい」「競技に出場するには」などのメールが相次いだ。なし崩し的に「協会」は実在したことになり、各地で支部が続々と産声を上げた。翌年には、全国から集った愛好家三十人ほどで競技大会まで開かれてしまった。

▼▼▼

入会に必要なのは愛着

現在、当初定めた会則だった。見る人が大いに楽しめるよう、現実感あふれる仮想世界を生みだだった。見る人が大いに楽しめるよう、現実感あふれる仮想世界を生みだ

への愛着だけ。米国や香港、台湾、ロシア、豪州にも支部ができた。

主な行事である競技大会の種目は三つ。一つ目が「マッチボックス」。横三㌢、縦四㌢のマッチ箱状の標的を一・六㍍離れて撃つ。五分五ラウンドの合計点で競う。正統派の射撃競技だ。

「フライシュート」は文字通り、ハエ撃ちを模す。標的が横一㌢、縦五㍉と小さい。わずか三十秒の制限時間と、的を外すと減点される厳しさは〝狩り〟を想定してのもの。最後が「コインペンドラム」。つるした五円玉を一分間で撃てるだけ撃つ。動く標的の難しさを実感できる。これまで開いた大会は大小二十回ほど。全国大会には百人近くが出場する。

▼▼▼

輪ゴムにまでこだわる

愛好家にとって競技と並ぶ楽しみが銃作り。すでに何度か技術革新を経た。例えば連射力。輪ゴムをかけるホルダー部を回転式にし、輪ゴムを何本も同時にかければ、マシンガンのような連射を体感できる。三百連発銃を作った人もいる。他に、素早いゴキブリにも効果的な散弾銃や、薬きょうのように輪ゴムを装てんする本格派も開発された。本業が漆職人の愛好家が作る輪ゴム銃は芸術作品の輝きを放つ。

だが、最大の技術革新はなんと言っても、輪ゴムのかけ方。輪ゴムを伸ばす際、片側だけを引っ張り、もう片方はゆるめておくと、実は初速が速まる。その分、威力と命中精度も向上する。意外な盲点だ。

愛好家なら輪ゴムそのものにもこだわりたい。私は常日ごろ、輪ゴム大手メーカー、共和の「オーバンド」を愛用し、事あるごとに人に薦めている。ある時、箱入りの輪ゴムが、お徳用の袋入りより命中精度が高いことを発見した。

輪ゴムは熱したゴムチューブを細く裁断して製造する。裁断後、看板商品の箱入りが一晩、平らな場所でじっくり寝かせておくのに対し、袋入りはまだ熱々の状態で袋に詰めるため微妙に癖がつくのだと、共和の担当者は懇切丁寧に教えてくれた。それにしてもよくそんな微妙な違いが分かりましたね、と言われたので事情を話すと、半ばあきれつつも感嘆してくれた。（なかむら・こうじ＝会社員）

奥山民枝「犬になった日」

尾の痕跡も付いてない。

二十年近く前、初めてこの絵を見たときの夢魔には胸苦しさを、今も忘れることができない。

奥山民枝の絵では、じつにいろんな動物の中に人間の女が身を潜ませている。あるときは鳥の中に入り、もうちょっとで尻尾も伸びて、毛も生える。長い耳にもふさふさの毛をなびかせよう。そう、あともう少し。

だが奥山民枝のこの絵、「犬になった日」は、つまりは「犬になれなかった日」の余微的な肖像画である。人間は犬にはなれない。そのぶんだけ夢魔の世界が濃く深くなるのだ。（一九七八年、油彩、麻布、四五・五×五三・〇㌢、個人蔵）

兄の死

「アニ キトク スグカエレ ハハ」という電報を受け生活を共にし、大いに語り合ったばかりである。

たしか、知人を訪ね、蒲田駅のホームに立っていた時である。轟音をたてて、勇ましい急行列車に飛び乗った。ところがその列車、名古屋の手前の刈谷かどこかで立ち往生になってしまった。名古屋市が、東京同様の夜間空襲に、母が大事にとっていた、二十日の発売を前に、予約だけでオンライン書店bk1のベストセラー二位（一一七日）につけるなど、早くも話題になりつつある。

『刀語』は、ある刀鍛冶が鍛えリーズを刊行する講談社BOXの印刷を施した「レッドブックワルツの雨」（幻冬舎）も刊行した。

雑誌連載なら珍しくないが、後で修正の利かない単行本だ。当事者たちは「向こう見ずな冒険」（シリーズ）を、ユニークにも力が入る。

ばかり。本というメディアの新たな可能性に挑戦する先鋭たちの実験に注目したい。

交遊抄

私がまだ駆け出しのエコノミストだったころ、ふたりの外国人女性に大いに薫陶を受けた。二十年も前のことである。一人は、英国王立国際問題研究所会長（現職）のデュアンヌ・ジュリアスさんだ。当時、パリ大学で教えていた私は、同研究所の国際経済部長だった彼女を知り大胆にもパリから電話をかけ出しのエコノミストだったころ、ふたりの外国人女性に大いに薫陶を受けた。二十年も前のことである。一人は、英国王立国際問題研究所会長（現職）のデュアンヌ・ジュリアスさんだ。当時、パリ大学で教えていた私は、同研究所の国際経済部長だった彼女を知り大胆にもパリから電話をかけ

もう一人は、仏国立パンゼショセ工科大学で国際経営大学院所長だったセリア・ルッソさんだ。一九八八年から六年間、私は彼女と共に技術系経営学修士コースを立ち上げ、カリキュラムの編成に取り組んだ。彼女は自分の教育哲学に足場を置きながら、外務省参与として国際問題にかかわっているのも、彼女の影響が大きい。

在、知の拠点である大学

＝会社員）

日の最前線
竹内 佐和子